春のことぶれ

釋 迢空

春のことぶれ（歌集）

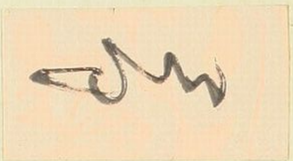
釋沼空

梓書房

春のことぶれ

釋迢空

桜藝房版



我がまをす

春のことぶれ　聽きたまへ

けふのあしたより後、
この國の文學
いよゝ盛りにおこり、
この國の歌
いよゝ弘くゆきとほらむ。

さるにても、

わが歌のいぶせさ。
かくしつゝ
いとゞさびしく　かそかに
ます〳〵に、思ひえがたくなり行きて、
つひに
花匂ふこの國の
文運に、あづかることもあらじ、とぞ思ふ。

昭和五年春王正月

釋　迢　空

目次

序

羽澤の家（八十八首）……一—四六
冬立つ厨（十一首）……三
枇杷の花（七首）……八
卒業する人々に（二首）……一二
をとめに誨ふ（十一首）……一三
となりの音（九首）……一八

出勤前（四首）……三三
もの忘れ（三首）……二四
冬來る庭（四首）……二六
羽澤の家（十九首）……二八
夜の茶（二首）……二七
零時近く（二首）……三八
別腸諧語（五首）……三九
晝のいこひ（五首）……四二
家の子（四首）……四五
入ご と（七十三首）……四七—九〇
先生（十四首）……四九

赤彦の死（十四首）……五七
かゝる人あり（三首）……六四
鵠の人々（十首）……六六
夏のわかれ（十一首）……七二
秋山太郎（九首）……七八
わかき人の家（七首）……八四
ある人に（一首）……八八
繪をかく夏子へ（四首）……八九
東京詠物集（五十四首）……九一—一三二
門中瑣事（三十六首）……一三三—一四六

山　か　げ（四十八首）……一四七—一七六
石見の道（三首）……一四九
甲斐信濃（三首）……一五一
隼人の國（八首）……一五三
山　道（十六首）……一五七
伊豫國（三首）……一六六
上州河原湯（十首）……一六八
多武峯（五首）……一七三
風　の　音（三十七首）……一七七—二〇二
古泉千樫（七首）……一七九

青山に向ひて（七首）……一八三
風の音（二首）……一八七
冬草（八首）……一八九
酒嗜む若き人に（一首）……一九四
七月十七日（三首）……一九五
王道（一首）……一九七
大嘗會近く（二首）……一九八
枝ひゞく（三首）……一九九
藤野一友（一首）……二〇一
旅の前夜（二首）……二〇二
氣多はふりの家（四十四首）……二〇三—二二八

氣多はふりの家（十九首）……二〇五
灘五郷（十四首）……二一五
甲種合格の大學生に（二首）……二二三
柁樓底歌（四首）……二二三
一の宮（五首）……二二六
大阪詠物集（三十二首）……二二九—二五〇
雪まつり（四十五首）……二五一—二七六
山（七首）……二五三
別所（四首）……二五七
雪まつり（二十六首）……二五九

洗馬長興寺（三首）……二七二
樗散留韵（五首）……二七四
昭和職人歌（三十六首）……二七七—二九八
春のことぶれ（八首）……二九九—三〇六
著作年表……三〇七—三一一
表紙假面圖……早川孝太郎氏

羽澤の家

冬立つ廚

くりやべの夜ふけ
あか〳〵　火をつけて、
鳥を煮　魚を焼き、
ひとり　樂しき

はしためにに、晝はあづくる
くりやべに、
鍋ことめける

この夜ふけかも

米とげば、手(タナ)ひら荒るれ。
今はもよ。
この手を撫でゝ、
誰かなげかむ

年かへる春のあしたは、
四十(ヨツヂ)びとぞ
と　思へど、
我は、たのしまざらめや

物ら喰ひ
腹のふくれて　たふれ寝る
われをあはれぶ人
或はあらむ

人の世の嫁が　とりみる寒き飯
底(ソコ)れる汁に
飽かむ　我かは

物見れば、

見る物ごとに、喰はむと思ふ。
むべ　わが幸も
喰ふに替へつる

前の世の　我が名は、
人に　な言ひそよ。
藤澤寺の餓鬼阿彌は、
我ぞ

過ぎ行ける　左千夫の大人は、
牛の腹の臓腑を貪り

よろこび給ひき

物喰みの
一期病ひに足らへども、
かそけく
心　うごくことあり

胃ぶくろに滿たば、
嘔りて　また喰はむ。
あき足らふ時の
あまり　すべなさ

枇杷の花

住みつきて、
この家かげに　あたる日の
寒きにほひを
　なつかしみけり

この庭や、
冬木むら立つ土　さむし。
　朝の曇りに、

　鳥のおりゐる

家びとに、
心すなほに　もの言ひて、
かりそめ心
　うちなごみ居り

たゞ　ひと木
　花ある梢(うレ)の　しづけさよ。
煤けてたもつ
　枇杷の葉の減(へ)り

風出でゝ
やがて　暮れなむ日のかげりに。
花めきてあり。
　枇杷の花むら

さ夜ふけ　と　夜はふけにけり。
起きてゐて、
　いそしめる子の
二階の身じろき

さ夜なかに、
　茶をいれて居るしづ心。
寝よと思ふに
　起きゐる子かも

卒業する人々に

道なかに
人かへりみず　たちつくす
道祖神(クナド)と　われと
　さびしと言はむ
櫻の花ちり〳〵にしも
　わかれ行く　遠きひとり
と　君もなりなむ

をとめに誨ふ

ひたすらに
心さびしくなり來(キ)なむ　時
　と　わが思ふ。
足らへるこゝろに

阪のうへに、
　白くかゞやく　町の屋ね。
ひたぶるに

われ
人を憎まむ

ゆくりなく
電車ごほりに　出たりけり。
　われは　あゆまむ。
おもて　ひたあげて

ふろしきに持ちおもり來る
根葱(ネギ)のたば　肉の包みも、
　あしからなくに

今日の日も、
ゆふげ　あさげの味ひに、かゝづらひつゝ、
　うら安きかも

ふところに殘り少き小錢(コゼニ)なり。
　あれを買ひ
　これを買ひ、
喜びにけり

はしためをとりて　往(イ)にたる門弟子(モンデシ)も、

あやまりて來よ。
のごけき　此ごろ

わが家の
飯炊ぎ女をつれ行ける
かの　弟子の子も、
さびしくて居らむ

人みなのうとみに馴れて　住むわれを。
をとめはしたも、
そむき行きけり

をとめ居て、
起ち居　寢し居間を見たりけり。
あはれに結へる　殘り荷の紐
密びとの
むつび　けがれし屋ぬちぞ
と　憎み言ひつゝ
さびしきものを

となりの音

うつり來しひそかごゝろは、
もりがたし。
隣りの家にあらがふ
聞けば

はらだちて
めをと　のゝしる聲聞けば、
我がいきのをの思ひ

くるしも

生きの身の
しゝむら痛く　ひゞき來る
人うつ人の　たなそこの
音

さしなみの隣りの刀自の　いき膚は、
ひきはたかれて、
響きけるかも

ひたすらに
なげうつものゝ　音響き、
隣りしづかに
なりて居にけり

あまりにも
隣りしづかに　なりにけり。
畳のうへを
わが　見つめをり

怒り倦み

泣きつかれつゝ　寝たりけむ。
隣りのめをと
明日は、さびしも

あらそひし心なごみに
眠るらし、隣りびとをや
さびしみて居む

くりやに　水音高く落したり。
隣りびとらよ。
さめろ　と　思ひて

出勤前

この日ごろ
心もはらになりにけり。
とる箸の色も
目にしみておぼゆ

白飯(シライヒ)の湯氣立つ
朝の暗けくに、
箸をとりつゝ

あはれ　と　言ふも
家の子よ。
今日のゆふげは　早く來よ。
きそも　をとゝひも
飯(イヒ)冷えて居し

わが家や
朝の飯にも、
なまぐさき　そへ一くさは
缺かれざりけり

もの忘れ

をとめらと
ことゞひ羞づること　しらず、
若き三十(ミソヂ)は
　ありにけるかも

いとけなく
　我とあそびしをみな子を
あはれ　と　思ふ時は

來にけり

あるき來て、
道にたゝずみ
　思ふことあり。
おほきもの忘れを
しける我かも

冬來る庭

山茶花のはな散りすぎて、
庭のうへに
　あたる日の色
　　濃くなりにけり

朝々に來ること遲るゝ　くりやめの
　若き怠りは、
あはれ　と　思ふ

萩は枯れ
つぎて、芙蓉も落ちむ
　と　思ふ
庭土のうへを
掃かせけるかも

庭に掃く　木々の葉音の、
　つばらかに
今日は、
心の　かなひゆくかな

羽澤の家

さびしさは、
大きむすめを　しなせつることを
言ひ出ずなりし　姉かも

大きなる袋を　二つ
積みてかさね、
遠來しことを
姉は言ひ居り

その面の
青きつやめきを　思ひ居り。
國びとのうへを
姉に　聽きつゝ

家びとの起ち居とよもす家　はなれ
來し　さびしさの
姉と思はむ

弟の家より　家に

うつり來しこゝろは、
病みて
のどかなるべし

家のうち
晝さへ暗し。
寢むさぼる姉のいびきに
怒らじとする

讀み書きの
人に劣れる小きをひを、

わが前によびて、
すわらせにけり

姉の子の二郎をの子よ。
睦ましみの　心たもちて、
肩うたせ居り

顏色をよく見とる子　と惡めども、
叱りがたしも。
あはれに思ひて

子らの上に、
思ひかゝはらず
田舎の家を　姉は言ひ居り。
　その古家を

亡き娘にかゝる話を
　われはする。
うつら病む姉は　おどろかねども

　この日頃。
をとめの如く

ほがらかに
もの言ふ姉を　安しと思はむ

二郎子を　叱るは
　母の心にあらず。
語はなやぎ
姉は　あらそふ

のどかなるうつけ心を
　よし　と思はむ。
うつら病む日を見るは

さびしも

わが姉の
心しまりに物縫ひて、
ゆふべの牕に、
今日は　居にけり

うつら病む姉を
ふたゝび家に送り、
おちつく心
した恥ぢて居り

留守まもる
をひのすさびを　叱らむとして、
うつけ心の姉に　悔いたり

日のうちに、
幾たび　我のあくぶらむ。
日ごろの姉の　癖うつりけむ

はらからは　はらからゆゑに、
似もしなむ。

おのも〳〵に
思ひ　さびしさ

夜の茶

しば〳〵も
あくびの起る　今宵かも。
い寝むとしつゝ
雨のおと聞ゆ

さ夜ふかく茶を　呑み飽けば
い寝むと思ふ。
汗をぬぐひて、床のうへに居り
ぬ

零時近く

寝欲(ネホ)しさを　こらへて
人にむかひ居り。
をり〳〵　おどろく。
われのことば

この夜ふけて、
机のうへにふりたまる
羽蟲とぼしく　なりにけるかも

別腸諧語

一

庭土のうへに、
素足の蹈みごゝち。
この　こゝろよさも
忘れ居にけり

來しかたは、

來しかたなり。
今はもよ。
よきねくたいの色も　このまむ
腹だちて
ほしきまゝにも　言ふわれか。
人とある人を
蟲　鳥にせり

二

まれ稀は

われの煎る茶を　嘗めなめて、
獨り居よさ　と　ほめ行く人あり
我よりも　若き人
多く　なりにけり。
妻得させむ
と　つげに來るひと

晝のいこひ

静かなる　ひと日なりけり。
日ねもすに
心ねもごろのふみを　書きたり

もの言はむこゝろ頻發(シキ)るを
おちつきて、
誰に書かむと、
紙に向き居り

用もなき
ふみを書く今日の　安らさの
意(コヽロ)を知らむ人　なきにあらず

山畠の麥の葉生(ハヒ)えを　蹈み暮し
今日も經つとふ
古ぶみ。
あはれ

のどけさの

ゆふべ到りて
　書き進み、
告げむと思はぬ　ことも書きたり

家の子

かどにいる　すなはち
我をよびたてゝ、
言ふ子のこゑの、
　なにぞ　なごめる

わが家のわかき子ゆゑに、
老いびとの
　ものねだりする心

たのしさ

疲れつゝかへり來ぬらむ
いへの子の　わかきはだへを
　洗はせにけり

うましもの　食はし
たらはす　家の子の
　よろこびあさき心を
まもる

人　ご　と

先生

亡くなられた三矢重松先生の病氣の、いよ〳〵重つた頃、ひとり、箱根堂ケ島の湯に籠つて、先生を記念するための、ある爲事に苦しんでゐた。

山川（ガハ）のたぎちを見れば、
はろ〴〵に
滿ちわかれ行く　音の
かそけさ

山川の滿ちあふれ行く
色見れば、
命かそけく
ならむとするも

夕かげに
色まさり來る山川の
水のおもてを
堪へて見にけり

山川のたぎちに
向きてなぐさまぬ
心痛みつゝ
人を思へり

岩の間のたゝへの　水の
かぐろさよ。
わが大人は
今は　死にたまふらし

風ふけば、みぎはにうごく

花の色の
くれなゐともし。
ゆふべいたりて

月よみの光りおし照る　山川の水
磧のうへに、
満ちあふれ行く

夕ふかく
瀨音しづまる山峽(カヒ)の
水に、

ときたま
おつる木の葉あり

先生、既に危篤

この日ごろ
心よわりて、思ふらし。
讀む書のうへに、
涕おちたり

わが性(サガ)の

人に羞ぢつゝもの言ふを、
この目を見よ
と　さとしたまへり

學問のいたり淺きは
責めたまはず
わがかたくなを　にくみましけり

憎めども、はた　あはれよ
と　のらしけむ
わが大人の命（イノチ）

末になりたり

先生の死

死に顔の
あまり　空しくなりいますに、
涙かわきて
ひたぶるにあり

ますらをの命を見よ
と　物くはず、

面わ　かはりて、
死にたまひたり

赤彦の死

山かげの刈り田の藻草、
　春さむみ、
白き根つばらに
　そなはりにけり

のぼり來て、
山葬(ハフ)りごに、
額(ヌカ)の汗　ひそかにぬぐひ

わが居たりけり

いちじるく生きにし人か。

風ふきて、

山はふりごは、

ほこり立ちつゝ

かそかなる　生きのなごりを

我は思ふ。

亡き人も、

よくあらそひにけり

山岸の高處（タカド）めぐれる　道のうへに、

人を悔いやまぬ

我が歩みかも

千樫も、心はおなじかるべし

わが友のいまはの面に

ひたむかひて、

言ふべきことば

ありけるものを

山里の古家(フルヤ)の喪屋(モヤ)に
人こぞり、
おのも〳〵の
言(コト)のしたしさ

山里の人の
往き來のむつましさ。
こゝに臥しつゝ、
ことゞひにけむ

ふか〴〵と

柩のなかにおちつける　友のあたまの、
髪の　のびはも

はろ〴〵に
湖(ウミ)を見おろす丘處(ヲカ)の家に、
こゝろぐゝあり。
さゝ波の照り

さゞれ波
つばらに見ゆる　諏訪の湖。
心はつひに、

釋けがたきかも

國學院大學生徒久保田健次君來たる

あらそひの心とけずて
死にゆける　友の子にあふ。
心親しみ

すこやかに　いまだありける
亡き友と　われと、
かゝる夜　茶を飲みて居し

柿蔭集の見返しに

七月二十六日、健次君よりよせ來つ

年たけて、
歌のこゝろの　ほそりゆく身を
思ひけむ。
ひとりある時は

かゝる人あり

さびしさを　口にすることなくなりて、
忍まひしづけく
　もの言ひにけり

思ひつゝひとりあらむ
　と　言ふ人よ。
若きはたちの　ことばにあらず

と

あやまたずあらしめし
かのをみな子も、
かつ〳〵
　我を　忘れゆきけむ

鵠の人々

櫧(カシ)の葉の　搔けば、
あとより　ふり來たる。
　その葉　また搔き、
わが居りにけり

言あらくあげつらひしが、
　さびしもよ。
　このごろ

歌の數へりにけり

よむ歌も　よむ歌も
　我をおごろかしゝ
わかきゝほひは、
　見せずなりたり

奥州に住む眞と金三と

國とほく
相住みにけり。

心荒びて　相したします。
若き人の如

太郎

火の國の
阿蘇の煙も、
見ずやあらむ。
仰ぐ心なき汝が心知る
思ひ見る

黒き目金の顔さびし。
こゝろ細りに
汝がいのち思ふ

家燒ける誠に

わが前に　來居て、
しづけくいふ言の、
かなしむに似ぬ　汝が心はも

昂庵

をとめらも　をとめの姉も。
この日頃
鄙ぶる汝に　おどろかずあらむ

增衛

かたくなに　人な憎みそ。
をとめ子は
あしきも　よきも、
愛(カナ)しきものを

智衲に

よき妻の
よきにつけても　叱る時、
ひそけき日々の心は、
をどらむ

夏のわかれ

十年まへの夏、子どもから育てた生徒の一人を、造士館高等學校へ送つた。其頃の寂しくて、乏しかつた日々は、この子の拘泥のない心持ちに救はれることが多かつた。たゝしてやつた日の記憶が、此ごろ頻りに鮮やかに浮んで來る。

青空の　うらさびしさや。
　麻布(アザブ)でら
　霞むいらかを

ゆびざしにけり

かげろへる大き銀杏の
　梢(ウレ)を見よ。

わが言ふまゝに、
　目翳(カゲ)さす子か

飯倉の坂の　のぼりに、
汗かける　白き額(ヌカ)見れば、
　汝(ナ)は　やりがたし

晝早く　そばをうたせて
待ちごゝろ
　ひそかなれども、
　たのしみにけり

しづかなる晝餉を　したり。
　いやはてに、
　そばのしるこを　啜ろひにけり

今日起きて、
三夜(ミヨ)さを徹(トホ)すわが爲事。

心悔いつゝ
　たひらかにあり

喰ふそばの
腹にたらふが、
　あぢきなし。
遠遣(ヤ)る心　さだまる如し

　時を惜しんで

さびしさを

我に告げむ　とする人よ。
いこひて行かな。
圓山(アルヤマ)の塔

塔の山を　おり來るあゆみ
默(モダ)深し。
やゝ夕づきて、風そよぎ居り

二年後、時々おこす手紙は、私を寂しがらせる樣になつた。

この憐(メグ)き心にも、

尙むくゆな　と　言ひたまふか
と　詞(コトナ)哭きにけり

ふみの上に、
こと荒(アラ)らけく吐りつゝ
下(シタ)むなしさの
せむすべ知らず

秋山太郎

高良山の山脇に、温石鑛泉と言ふ湯場がある。そこの長男に生れて、一昨年國學院大學を出た。恐らくは、苦勞も知らず過したであらう。唯一つ、我われ知り人の心を暗くする惱みを、自身一人で持つて死んだ。死んだ病ひは、肺結核である。杉千秋と假り名をつけてゐた。

若くして　死にゆく人は、

日ごろさへ
言ひ出る語の、
胸に沁みしか

はじめて教師となつて行つたのは、日向高鍋の中學校であつた。そこからは、景清配流の物語りなど、傳承の採訪記を送つてくれた。こんなもどかしい爲事に、興味は持ち相もなかつた彼であつたのである。

日向の海
遠長濱に向き暮し、
經がたくありけむ

言のしにしさ

霞ゐる兒湯の高原
行くへなく　出でつゝ　遊び
かそけかりけむ

うき我の心も　なぐや
と　送り來し
生目八幡宮の由來書き　あはれ
あり憂さを

常言ふ我の　むなしさや。
若き命の　盡きぬる
見れば

とりとめず、はた、つきつめた物思ひを、
若い多くの人の上に見て來た自分も、彼ば
かりには、慰めかける方がつかなかつた。
さびしい血の流れ。さしあたつてのむごい
病ひ。その國人は、私に、彼の底の心の惱
みを、暗示してきかした。

若き時のひたぶるごゝろの
危さを　言に出ず、

我が
あはれ　と思ひし

死ぬる子は、
若き心を　いさぎよく　もちくてこそ、
さびしかりけめ

いまは、
われの心も　ひそかになりなむ
と　目をつぶりけむ
牀のうへはも

その夜の七時

十一月　ついたち
秋山太郎　亡(ウ)せにけり。
この電報を
疑はめやも

若き人の家

庭土のうへに照る日の
　あかるさや。
この月ごろを
　かくしつゝ經ぬ

この町の住みよさに、
　妻もなれぬらし。
父母のうへを

言はずなりぬる

宵早く子をねかせつゝ、
音たてぬ妻も、
　心の
　　さびしくあらむ

東京に行きて住まむ
　と　言(コト)に言ひて　息づく心
　妻は知りたり

しめやかに　もの言ひて、
まれにゑまひけり。
この若き人も、
よく生きにけり

道遠く　疲れ來て、
人は欲(ホ)るらむを。
しめやかに　ものは
言ひがたきかも

國遠く

この若き人を　住ましめて、
世のかそけさを　知れ
と　言ひつる

ある人に

妻のゐしくりやに向きて
　思ふなり。
日に　稀にのみ
　おもひいでつゝ

繪をかく夏子へ

生れ子の汝(ナレ)を抱きて、
　汝(ナ)が母の、愁へしことも、
　　きのふなりけむ

疊のうへに、
　立ちつゝあるく汝(ナレ)を見て、
いぶせき時に、
　父は笑ひし

腹だちて、口ごもり言ふ
父の顔をさびし　と　見つゝ
　この子はあらむ

うるみたる赤き眦（マナジリ）を　かきそへよ。
父の似顔の
　あまり足らへる

東京詠物集

東京詠物集

木場

木場の水
わたればきしむ　橋いくつ。
こえて　來にしを
いづこか　行かむ

橋づめの木納屋の　木挽(コビキ)

音　やめよ。
大鋸(オガ)の粉　光る
風のつめたさ

冬　木

燈(ヒ)ともさぬ辯財天女堂(ベザイテンニョ)
庭白し。
近みちしつゝ
人行き　とほる

深川の　冬木の池に、
青みどろ　浮きてひそけき
このゆふべなり

深川神明
——友人なるその神主の爲に

地震頻發(ナヰシキ)り
蹈みためがたきひた土に、
まづ　をろがみし
神のみ貌(カホ)

焼け原の　たゞ中に坐(ヰ)て、
哭きにけり。
わがみ社は、
やけまさずけり

明石町

あぢさゐの花の盛りの
かくありし　河岸(カシ)道來つる
幾年なりけむ

歌舞伎座

をとめ子の　黒髪にほひ
顔よきに、
聲ほがらさの
さびしき　役者

銀座

街のうへに

いきれて　あがる土ぼこり。
家並(ヤナ)みの飾り、
くるめきて見ゆ

この町の古家のしにせ
賑へど、
あきなひ早くなりて
さびしさ

かたよりて
我が立てる　銀座尾張町

かくも、
處女は　充ち行きにけり

いとけなくて、
我が見し町のむすめ子に
似つゝは　行かず。
都のをとめ

芝　浦

わが心　むつかりにけり。

砂のうへの　力芝を
ぬき
　ぬきかねてをり

芝圓山

かの子らも、
來ずなりぬる圓山に、
　のぼり居て　また
　くだりか行かむ

増上寺山門

仰ぎつゝ
都ほろびし年を　思ふ。
　このしき石に、涙おとしつ

國びとの
心さぶる世に値ひしより、
　顔よき子らも、
頼まずなりぬ

麻布　善福寺

おごろかぬ心にし　ありけり。
麻布でら
大き銀杏を
見に來たりけり

目黑不動

こゝにても、
行人（オコナヒビト）は住み居りて、

賑ふ三味を
さびし　と言ふらむ

東京すていしょん

停車場の人ごみを來て、
なつかしさ。
ひそかに
茶など飲みて　戻らむ

あわたゞしき人の　行きかひを

見て居たり。
心ほがらに、
まさびしきかも

ひたすらに　旅にむかへり。
我が心。
遠ゆくむれを　まもり居りつゝ

宮城

ほの〳〵と

み苑の芝原（シバフ）　色映えて、
大き御門（ミカド）の
をがまれ給ふ

司びと　事あやまてど、
何ごとを
大き御門に向きて
まをさむ

豐明殿

大君の畫のおまし
近からむ。
心明らかに
つゝましきかも

賢所

國土稚(クニワカ)く
世は太初(ハジメ)に還るらし。
心むなしく
大庭に居り

大君の内つみ庭の　土のうへに、
いちじるしもよ。
うつる　我(ワレ)の影

大君の御門の衞士(エジ)の
髯ぬきてあるに、
現實(ウツツ)しき　我が身と知れり

大君の大き御門の門守りは、
叱らむとすも。

我が着る物を

隼町

日のうちを
おほかた　とざす家のなかは、
物の在り處(ア ド)の、
　ひそかにあらむ

人の家に、
ひそかに來り、ひそかに去る

このやすらさは、
人に告げじな

清水谷公園

なめらかに、
輪痕(ワダチ)をつくる自動車の　追ひ風
　かろく
　ほこりをあげず

一つ橋

この國の語を
口にせずありし
羅(ラヲ)先生に、
我も似て來つ

——羅氏、語學校蒙古語科の舊講師

飯田町

あゆみ來て
たゝずめりけり。

言出(コトイ)でゝ
はたとせ遂げぬ　かね言のある
友多く　うとくなりゆく
時(ヨ)の末に、
國學院のあとを　見に來つ

牛天神

いこひつゝ
心やすらに　なり居たり。

宮の屋根より、
煤ふり來るを

金富町

寺山のなぞへを占めて、
さがりたり。
くわぞくの　庭
庭は　うらやまし

この町に、

遊びくらして　三年居き。
寺の墓藪
深くなりたり

富坂

――こゝの下宿に、久しく赤彦が居た。

阪下に　街廣らなり。
生ける日の
友としたしみ、
人を見に來つ

憎みがたき心
ほがらに言(コト)ごひて
　我(ワ)はもよ。
　友を死なせざりけり

好(ウル)はしく　あひ見し時の
ひたやせてありし　面わを
　思ひ見む。われは
山(サマ)村の人の愚かを

我に告げ、
　ゑみがたき時に、
　笑はせにけり

山の家に　還り住まむよ。
かたくなに、
我(ワ)を待つなり
　と　さびしがりけむ

雜司ヶ谷

穂すゝきのみゝづく
呆(ホ)けて居たりけり。
日ごろ
けはしく　我が居りにけり

面影橋

町溝と　濁り
泡浮く川のうへに、
山吹栽ゑて、
人すまひけり

須田町

かれも　此も
ひと時　なりけり。
軍神(グンジン)の高き頬骨(ホゝボネ)は、
ゐやまひを殺(ソ)ぐ

おもかげの廣瀬中佐は、
よかりけり。
現(ウツ)しきものは

さびしかりけり

神田明神

明神の建立（コンリフ）
おそし。
善き人の目を いたまする
焼け土の つか

湯島天神

まゐり來て、
とみに あかるき世なりけり。
町家（チャウカ）の人の
その顔がほ

切り通し

金持ちは、
金持ちとしてあらしめむ。
この塀も
かの 大松もよし

西片町十番地

——椎の古木

とゝのほる屋並みに向きて、
いにしへの荒野の姿
想ひ見がたし

岡原の荒草なかを
彼行此行(ヲチコチ)して、
館處(タチド)見立てし

いとなみ　あはれ

この館や、
南に向きて、
朝　夕日　直射(クヾサ)す館
と　祝(ホ)きはじめけむ

根　津

道なかに、瀨をなし流れ行く水の
さゝ波清き

砂のうへかも

淺草

觀音のみ堂やかじ
と言はざりし心々は、
したなげきけむ

門中瑣事

門中瑣事

近代の生活は、絶えざる過程のうへに、意義と價値とがある。其爲こそ、反抗も破壞も、倫理的態度に這入つて來るのである。新しい生の論理を見出さう、との共通の負擔から落伍して、のゞかに途中の樣式を享樂し、愧ぢなく留つてゐる事は、遊戯であり、惑情である。山ノ上ノ憶良ノ大夫の時代は、宗教的煩悶が社會をゆすつて居た。今は、兩性生活の上に、不退轉の自由が、仰望せられて來てゐる。其

焦燥の傾向は、正しい纔かの犧牲者以外に、數へきれぬ惑溺讃歎の徒を出した。こゝにも、一人の男がある。國の道念・情感の本質を究める學覺に薫陶せられた間の五年、其後の三年、多くは私の指導に從うて來た。中年にして、門中に盟みを深めて來た者であつて、私の懷く新倫理主義の拍子に、一つ鼓動を搏つてゐる樣に見えた。

妻なる者は、久しく私の家の廚を預けた女子。一旦、私及び彼の先妻の迂闊を竊かに嗤ひつゝ、相かたらふながらひを、彼等が契るや、私は勞役を意とせぬ忠勤の婢を失ひ、家を逐はれた人となつた彼

の妻は、泣いて備後の山村に還らねばならなくなつた。

其後二年、復、先夫人と同じ境遇が、後の妻の上に來た。子を產んで、容易に癒えなかつた彼女の、思ひがけなくも、既(ハヤ)く肺痨を疾んで、第二期の末に傾いた症狀に居る事が、彼の耳に告げられた。彼の欲情は既に、彼女に慊いて居り、うるさい私を脫れた彼の空想は、誇大想見痴者に近づいてゐる頃であつた。彼は、口實と實感とを假託するに、國家有用の材、一婦人の衰病に染むことを、肯へてする事は出來ない、と唱へ續けて居ると聞いた。

大正の年も、數日に果てようとするある朝、生後二月に滿たぬ子と枕を並べて、寢返りも哭く妻の惱みを見捐て、姿を晦まして、年改つても歸らなかつた。年の瀨に、巾着は一錢の銅貨をも蓄へず、餓ゑを喚く子の爲に、一合の乳を購ふ事さへ出來なかつた。

妻なる女子の心は、純にして粗、都に住み馴れて、尙いまだ、安房の岬の潮の香を失はなかつた。無知に近い彼女の情念が、身のある樣を、どう思ひ廻してゐることであらう。

をとめ子の守りしくりやは、
蚯蚓鳴き　冬菜凍みつき、
秋　冬を經ぬ

大歲の日ざし　をどめる
牀のうへ。
身を思ふ力も　なくなりにけり
しば〳〵も、

まごろむ我か。
うつ〳〵に
子を見れば、
常に　ねむり居にけり

泣きあぐる聲の　みじかさ。
乳兒(チゴ)の息の
　いや細ぼそと
なりて　ゆくらし

すこやかに　遊ぶ子どもか。

うつら〳〵
乳兒を寢せつゝ
　聲　聞え來も

病み臥して、心なごめり。
年の瀨を遊ぶ　子の群れに、
身は　行かねども

小路(コヂ)多き　麻布(アザブ)狸穴(マミアナ)。
年くれて、
明日の春衣(ハルギ)を着たる

子も居り

おもかげに　たつふる里や。

海凪ぎて、
今日しも
人は、
潛(カツ)きしてゐむ

あり〳〵て
着欲(キホ)しき帶も　買はざりし
かゝる悔みも、

今は　言ひけり

〃

諒闇に　歳窮(キハマ)れり。
世の人のうへも、
しづかに
我は　おもはむ

まことあることばを
汝(ナレ)は　戀ひにけむ。

安房のみ崎の里　別れ來て

今はもよ。

歎かひ憶(ワカ)れ、

ひたぶるに

身を悔ゆらむか。

心のごかに

家びとの

めをと睦(ムツ)びて、もの言ふを

よしと聽くらむ。

心よわりに

朝宵に、

粥をすゝろひ　思ふらむ。

喰はせてくれむ

大き　白き手を

〃

すべなきに似たるこの世も、

相なごみ

おのづからにし
道はとほれり

平凡(ヨノツネ)のこと
と　思ひて　在るものを、
目にあたりては、
心くだけぬ

もの知らぬ鄙(ヒナ)つ女(メ)を　よしと
婚(マ)ぎけむに。
この　情濃(ナサケコ)き直妻(ナホツマ)を

あはれ

こと足らぬ病の牀に、
妻をおきて、
棄てゝかへらぬ
汝が名宣(ノ)らさね

をみな子は、すべなきものか。
病みて　子を産み、
憑(タノ)みし人は
家に來らず

をみな子は、さびしかりけり。
身の壯(サカ)り　ふみしだかれて、
なほ　戀ひむとす

寢し夜らの　胸觸(ムナフ)る時の、
身に染(ソ)みて　忘れぬものを
あはれと思へ

わが家のくりや處女(ラトメ)は、
赤ら頰(ホ)のすこやかにして、

汝(ナ)に思はれし

〃

石見のや
山寒邑(フルサト)を目に熟(ナ)れて、
狹く　さがしく
汝(ナ)は　生ひにけり

幼(ヲサナ)くて　うからなごみを知らざりし
性(サガ)と思へど、

さびしかりけり

八年まで　叱りきためて、
かひなさよ。
この　たはれ男ヲは
うつらざりけり

〃

いやはてに　我が言ふ語ぞ。
あはれよ　と

自今以後も、
汝を思はむ

ほと〳〵に
我が倦みにけむ。
汝を見じ　と思ひさだめて
下安らさよ

世の相に　思ひ深めよ。
ありさりて、我が心を知るこ
ありなむ

〆

乞丐(コツガイ)も、
虚無(キヨム)の徒黨も、
偶雙(ツマタグ)ひ　賑へる世は、
亡びざりけり

汝に說きて、强ふるは止(ヤ)めむ
歩み來て
人間の道

さびしかりけり

〆

わがあとに　來し跫音(アシオト)も
せずなりぬ。
身は　ほがらさの
まさびしきかも

さびしさに　堪へむと思ふを、
人と居る　心饒柔(ニギヤ)の

こほしかりけり

これの世は、
屋竝(ナ)み賑ひ、人滿ちて、
語(コト)なごやかに　とひかはすらし

あしき人に、
善き人雙(タグ)ひ
善きひとも、事あやまちて、
あはれなる　世や

かならずも
親の　子思はぬ世なりけり。
ひたぶるに
人は　戀ふべかりけり

世の澆季(スエ)の誠と思はむ。
戀ひゞとぞ
もの言ふ時に、
わなゝきにけり

山

かげ

石見の道

邇磨(ニマ)の海
磯に向ひて、
　ひろき道。
をとめ一人を
　おひこしにけり

磯山の小松が下(シタ)の　砂の色
著(シル)きを見つゝ、

夕たけにけり

家群(ヤムラ)なき
邇磨の磯べを　行きし子は、
このゆふべ
家に　到りつらむか

甲斐　信濃

ま向ひの　棚田のくろをのぼりつゝ
子らの帶見ゆ。
赤き　その帶

山かげの沼べの草の
春の葉は、
芽ぐむとすらし。
ま日の　しづけさ

み山木の谿きはまれる　山の上に、
ひとり　我が坐(ヰ)る
ことを思ふも

隼人の國

屋のうへに
聲ふえて鳴く
朝鳥のさわぎを　聽けば、
ねぶりけらしも

この夜明けて、
やがて　曇らふ
野のうへの靑みを見つゝ、

わがあるき居り

日のくもり
ゆふべに似たる　野のおもに、
色たち來たる
木ばちすの花

あゆみつゝ
憂へむとする　心かも。
兒湯（コユ）の山路
ひたに　とほれり

ひたぐもる　水のうへかも。
鹿兒島の町のいらかは、
波がくれたり

船のうへに、
幾時經たる思ひぞも。
日向の海を
岸（へ）つきて行くも

曇る日の

まひる　と思ふ空の色
もの憂き時に、
山を見にけり

船のうへに居つゝ
思へば、
夕まけて
雨にさだまる　空明りはも

山道

徳本峠

ふたゝびを
み雪いたれる山のはだ
いまだ　緑にあるが、
さびしさ

まむかひに

穂高々峯の　さむけさよ。
雪を　かうむる
青草のいろ

小梨澤

――城破れて落ちのびて來た飛驒の國の上藺の、杣人の手に死んだ處。

いにしへや、
かゝる山路に　行きかねて、
寢にけむ人は、

ころされにけり

雨霧のふか山なかに
息づきて、
寢(ヌ)るすべなさを
言ひにけらしも

山がはの澱の　水(ミ)の面(モ)の
さ青(ヲ)なるに
死にの　いまはの
脣(クチ)　觸りにけむ

をとめ子の心　さびしも。
清き瀬に
身はながれつゝ、
人戀ひにけむ

峰々に消ぬ
ささらぎの雪のごと
清きうなじを
人くびりけり

上河内

夕空の　さだまるものか。
ひたぶるに
霽れゆく峯に、
むかひ　居にけり

きそよりの曇り　きはまり
夕ふかく
遠山の際に
澄める青空

山中に
わが見る夢の
　あとなさよ。
覺めて思ふも、
かそけかりけり

山中にさめ行く
　夢の
こゝろよき思ひに　沁みて、
　はかなきものあり

日のゆふべ
板へぐ音を　聞きにけり。
今日は、
日ねもす　聞え居にけむ

山小屋に、
　日てり　雨ふり
ひねもすに
人のはたらく　音
　聞えけり

山の湯の　夜はのたゝへに、
つく〳〵に
目をみひらきて
わが　居りにけり

山晴れて
寒さ　するどくなりにけり。
膝をたゝけば、
身にしみにけり

ゆふやけの
たちまち暗き　夜となりぬ。
山黒々と
雨たれてをり

伊豫ノ國

久萬

阪こえて、
またひらけ來る
山川(ヤマガハ)の　見のさやけさも、
我(ワレ)あきにけり

しづかなる　いこひなりけり。

山岸に、
石を撫でつゝ
時經つ　と思ふ

松山

——町に入つて、八朔雛を賣る子のむれにあふ。

旅を來て
心　つゝまし。
秋の雛　買へ　と乞ふ子の
顏を見にけり

上州河原湯

ひそ〳〵と
土にひゞけり。
山岸の　この藪のうへゆ
人の行くらし

桂木の　早きもみぢの、
岩のうへに
散れる葉を見れば、

ともしかりけり

畔ごとに、色わかれつゝ、
向つ山
見わたし曇る
青き田と　畠

秋にむかふ
山のたつきの　かそけきに
ことしは早く、
雹ふりにけり

雹ふりて
秋　たのみなし。
村のうちに、
　旅をごり子も
入れじ　といふなり

村の子は、
　大きとまとを　かじり居り。
　　手に持ちあまる
　　青き　その實を

村童
　晝　すさまじく遊ぶなり。
田にとぶ　蟲も
　多く　喰はれつ

　山なれば、
秋のみのりの　うらさびし。
稗田の穂なみ
　かたく立ちたり

稗の田の水を　落して、
何せむに
蚯蚓を掘りてゐる　翁あり

やはらかに
眠りもよほす　こよひかも。
谷のまがりの
音ふけにけり

多武峯

神寶（カムダカラ）　とぼしくいますことの
たふとさ。
古き社の
しづまれる山

僧定慧將來の奄羅果樹（アムラクワジュ）と傳へる木が、栽
ゑ繼がれて、今にある。

人過ぎて、

おもふすべなし。
傳へ來(コ)し　常世(トコヨ)の木の實
古木となれり

きその宵
多武(タフ)の峰より　おり來つる
道を思へり。
心しづけさ

いこひつゝ
朝日のぼれり。

幾ところ
山のつゝじの　白き
さびしさ

わが居(キ)る　天(アメ)の香具山。
おともなし。
春の霞は、谷をこめつゝ

風の音

古泉千樫

病ひをみまうた夜

ま夜なかに、
汗をぬぐひて　書きつがむ
文(フミ)の興味も、
たえてゐにけり

こぞよりまた

今年は　汗の　はなはだし。
物書き倦みて、
燈をあふぎつゝ

おほよそ
棒ほどの物を　ひくならし。
宵より荒るゝ
天井の鼠

わが友の　生きよわりつゝかく汗を
思ひ見がたく、

我がつかれ居り

あきらかにもの言はむ
と　する友の顔。
かくしつゝ
息も　細りゆくらむ

あるじ病む家

まづしさは、
言(コト)のなぐさに言ふごとし。

疾みて
　その聲ほがらなりけり
あるじ疾む屋ぬちつめたき
　疊のうへに、
この子は
白き額(ヌカ)をあげたり

青山に向ひて

赤松の繁(シ)みたつ山の
山の際(ハ)の
遠青ぞらは、
たゞに　さびしさ
息づきて
　かそけかりけり。
夏ふかき　山の木蓮子(イタビ)に、

朱(アケ)さす　見れば

ひそかの心にて　あらむ。

旅にして、

また　知る人を

亡(ナ)くなしにけり

みなぎらふ光り　まばゆき

晝の海。

疑ひがたし。

人は死にたり

遠く居て、

聞くさびしさも

馴れにけり。

古泉千樫　死ぬ　といふなり

まれ〳〵に

我をおひこす順禮の

跫音(アノト)にあらし。

遠くなりつゝ

なき人の
今日は、七日になりぬらむ。
　遇ふ人も
　あふ人も、
みな　旅びと

風のおと

雪の來ること
おそき年　と思ひ居り。
　羽織のしつけ
　とりて著むとす

おしつまりて、
　にはかに寒し。
人よびて、

夜着のつもりを
立てさせにけり

冬草

十二月十八日、粉雪しきりに降る。國學院の行くすゑ、思ふに堪へがたし。晝過ぎて霽れ、わびしけれども、心やゝ朗らかなり。

還り來む時を
なし　と思ふ。
ひたぶるに
蹈みてわが居り。

冬草のうへ

學校の庭
冬ふかくそよぐ　草の穂や。
なにを　はゞかりて居たる
我ぞも

學校の屋敷を　かぎる寺林
冬に入りぬる
ゆづり葉の垂り

なにゆゑの涙ならむ。
つくばひて
我がゐる前の　砂に
落ちつゝ

休み日の講堂に　立ちて居たりけり。
見る〳〵に、
こゝろ
かろくなるらし

きのふは、おのれ、源氏物語全講會の事

をつぎて後、四年目第二學期の最終日なりき。

十日着て、
裾わゝけ來る　かたみ衣(ギヌ)。
　わが師は
つひに
　とぼしかりにし
師の道を
つたふることも絶えゆかむ。

我さへに
人を　いとひそめつゝ
　まづしさの
　はたとせ堪へて、
死にゆける　師の
みをしへは、
　明(アキ)らめがたし

酒嗜む若き人に

いにしへのおほき聖は、
酔ひ〳〵て
ゑひなきてこそ
心　澄みけれ

七月十七日

七月十七日、
師の日と思ふ　今日の日や。
いたみ出づる歯を
こらへつゝ居む

師のおもわ
想ひ得がたくなり行くか。
寫眞のみ眉

見おぼえなくに

聲張りて
わがものまをす　いさゝかの
心勉(シマ)りをも、
喜びたまへり

王道

年ごしに　思ひやれども、山水をくみて
遊ばむ　夏なかりけり

——明治御製——

大君は
あそばずありき。
髣髴(オモカゲ)に
夏山河(ガハ)を　見つゝ
なげゝり

大嘗會近く

霜月の日よりなごみの
　空ひろし。
天つ日高は、
　齋籠(モノオモ)ふらし

大嘗會(エ)　近づきにけり。
ことぐに　足らふに似たる
心　さびしも

枝ひゞく

——平岩十四郎の爲に

はやりかに
ものは　言ひしか。
　かつぐに
よき十四郎(トシラウ)を
見ずならむとす

ほがらかに
心　ならむとす。
とぼしくて
ひそかになりし人　と思ふに

人の死ぬることを
かなし　と思はねば、
この傳言(ツテゴト)の
ひたに　さぶしさ

藤野一友

——はじめて來た日

疊のうへに
はらばひ　あぐる乳兒(チゴ)の顏。
さびしき家を
うたがふらしも

旅の前夜

爲事にありつかせよ　と言ふ人に、
　向きて　さゝへをり。
熱のあるからだ

あすの夜の旅を　ひかへ、
　つかれをり。
熱もちて思ふ。
壬生(ミブ)の念佛(ネブツ)を

氣多はふりの家

氣多はふりの家

氣多の村
若葉くろずむ時に來て、
遠海原の　音を
聽きをり

氣多の宮
蔀(シトミ)にひゞく　海の音。
耳をすませば、

聽くべかりけり

海のおと　聞えぬ隈に、
宮立てり。
ひたに明るき
　　蔀のおもて

たぶの杜
こぬれこと〴〵　空に向き、
青雲は、
今日も

雨　なかりけり

たぶの木のふる木の　杜に
入りかねて、
木の間あかるき
　かそけさを見つ

はろ〴〵に
見隠れにけり。
ひとつらの
汽車のわだちの　音

殘りつゝ

砂山の　背面(ヲチ)のなぎさも、
　昏れにけむ。
夕どゞろきは、
音つのりつゝ

このゆふべ
潟の田うゑて　もどるらし。
聲に　ひゞくは、
　遠世(トホヨ)の人ごゑ

わたつみの響きの　よさや。
　松焚きて、
　棲(キツ)初めし夜らに、
言ひにけらしも

　見のかぎり
波なる濱を　わびにけむ。
あから顔の子も、
祖(オヤ)となりつゝ

祖々(サヤ)も
　さびしかりけむ。
蠣貝と　たぶの葉うづむ
吹きあげの沙

わたの風
沙吹きあぐる　しく〳〵に、
　うき村住みを
　おもひけらしも

ひと列に

白きは、
　齊(チ)墩果(サ)の盛(サカ)りならむ。
　　こよひの凪ぎに、
しづまる家(イヘ)むら

蜑をみなの　去(イ)にしを思ふ。
あしがたの、
　いつまでもある
　　門(モン)のしきゐ

まれに來て、

心おちゐぬ。
目ぐすりの古法つたふる家
と　言ふなり

ゐ

われに言ふ
人の心のかくれなし。
醉ふをおそれて、
あるが　さびしさ

醉へば、
心　ひとむきなりけり。
門弟子のさがを
我が憎み、
逐ひてうたむとす

いきどほりの　心
をさまり行くを　覺ゆ。
按摩をとらせ
わが居たりけり

朝闇に、
郭公(クワクカウ)が
近く鳴きにけり。
今日は、
ひそかの心にてあらむ

灘　五郷

物喰(ハ)めば、
ほがらの心　わき來もよ。
細螺(シタゞミ)の殼を、
齒に破(ワ)らむとす

おりたちて、
磯の小貝を　つゝきくじり、
浦の子の喰ふ如く

喰ひつゝ

柴負ひて
來る子　くる子も、顏よろし。
かゝる磯わに、
なごむ村あり

子どもらは、
背負縄(シヨヒナハ)かけて　續きたり。
放課時間の里ゆきとほる

山路來て、
髪髢(オモカゲ)さびし。
激(タギ)つ瀬の泡
唇(クチ)ひゞく
炭酸水のいろ

燈のつきて、おちつく心
とび魚の　さしみの味も、
わかり來にけり

默(モダ)行く心　知らざらむ。

連れ人は、みなから若く
たのしむらしも

はかなさは　告げじとおもふ。
おのづから
先だち歩み
ひたすらにあり

緊り來る夜目あはれなり。
若き人の、
起きてする如く

寢てふるまふに

ふたゝびは、
訪はずや　あらむ。
屋敷森の掘り井の水を
口含みつゝ

にぎはしき　港なりけり。
うち出でゝ
見る島々も、
家むら多し

緑濃き
能登の島かも。
海ぎはまで、かたぶく畠に
穂麥赫(アカ)れる

ありうさに　息づく人も、
なし　と思ふ。
能登の七尾に、
われは來てけり

苦しみて
つひに　遂げざらむ
つくづくに、
世の和平(ニギハヒ)のこほしかりけり

甲種合格の大學生に

兵隊にとらるゝことの
にぎはしき　心をごりは、
さびしかるべし

兵隊のからだ苦しき
　安らさは
告げやすからず。
若き人にむきて

柁樓底歌

さかりつゝ
　晝となり來る　汽車のまど。
　　敦賀のすしの
　　とればくづるゝ

煤まぜに
すゞ風とほる　汽車のまど。
　寢つゝ　思へば、

遠のきにけり

さかり來て、
いよ〳〵　さびし
と　ぞ思ふ。
能登のみ崎の
おほ海の色

夏海の
荒れぐせなほる晝の
空。

われのあゆみは、
音ひゞくなり

一の宮

ことしも　來て、
この家の前庭に、向ひ居り。
あるじのやまひ
　こぞのまゝなる

聲ふえて
鳴くなる蟬か。
あかり來る

屋敷林の、梢を見につゝ
いとまつげて　いなむ　と思ふ。
　晝ふけて
あるじの臥處は、
　ひそまりて居り

朝の飯
湯氣立ちてゐる　のどけさを
人とむかひ居、
言へば　さびしさ

日ヶならべて、
旅のくるしさ。
汗ぬぐふ　われの心は、
泣かむとするも

大阪詠物集

大阪詠物集

梅田

家びとの老いを　省に來し
大阪の
とよもす町は、
住みがたきかも

中の島

河波の夜の　やはらぎを
聽き剩(アマ)し
洲(ス)に臥(ヌ)る人を
逐ひうつなかれ

河波の濁りかゞやく
曇り空
魚を燒かせむ。
船にいこひて

日本橋

道頓堀
橋のうへより、
おほさゞき　神のいらかに
棲(ナ)る鳥の見ゆ

道頓堀

ひたすらの
心なごみや

小屋ひろし。
天井をながめ　人顔をながめ

顔見世のうち出しに、お福と彦徳（シホブキ）とに扮した二人が、太鼓囃しにつれて、人形身で、采をふりながら、踊る行事を、錣、うちと言うた。

おもしろく
打つしいころかな。
その踊りを見つゝ　思へば、
忘れ居にけり

千日前

おのれまづ
たはれ遊びし　にはかしの
をこの笑ひは、
人忘れけむ

自安寺の髯剃小路
見しりあり。
殘れるものゝ、

ゆくりなきかも

もろ膝を　あらはに
土のうへにゐる
かたゐを見れば、
かれ　笑ひけり

木　津

この村ゆ、
教如上人　海に出でゝ、

村びとは
海を　望み來にけり

木津鷗町

やうやくに
族人(ウカラ)かずへり　ゆき〳〵て、
歳の夜を　遠き
ふるさとの
おもひ

あきうどのなりを守らず
經し家や。
去年は
我(ワ)を待つ兄も　居にけり

西の宮えびす舞し

朝戸あけて、
まづ聞く耳の　すがしさや。
えびす舞しよ。
何を獻(オマ)さむ

天下茶屋

年にあけて、
初卯の今日ぞ。
道に出でゝ、人を眺めむ。
春のころもを

十日戎

ほい駕籠を待ちこぞり居る　人なかに、

おのづから
われも
待ちごゝろなる

逢　阪

逢阪の増井の清水
凍るらし。
歳の夜ふかく
思ひ居にけり

合邦个辻

極めて幼い頃の夜の外出の記憶。其は夢であつたかも知れぬ。天王寺と木津との道の間。唯一つ憑みにした閻魔堂のみあかし。十數年來、大晦日になると、まざ〳〵と幻影のやうに浮ぶ。あつた事か。空想の固着か。

晦日夜の　あらし
燈（ヒ）　煽（アフ）つ　堂の隈（クマ）。
目にのこりつゝ
現實（ウツ）なりけむ

一心寺

道に向く逢阪寺(アフサカデラ)の
墓石の
夕つく色を、
見てとほるなり

四天王寺

西門(サイモン)はたそがれて

風吹きにけり。
經木書かむ
と　言ふ人あり

舍利寺

小橋(ヲバセ)過ぎ、
鶴橋　生野來る道は、
古道
と　思ふ　見覺えのなき

今宮中學校

世のなかにしたがふ道を
說かざりき。
あやまち多き
教へ子のかず

年を經て
聞くさびしさや。
教へ子は
おのも〳〵に

よく生けれども

われの世のさびしきに、
ならひ　ゆくならし。
かそけく生きて
教へ子はあり

年を經て
思ふことこそはかなけれ。
おほくは、
古き教へ子のうへ

菊の花　まだきすがるゝ
　煤の庭。
この校長も　老いそめにけり

天王寺中學校

あかしやの花　ふりたまる
　庭に居りて、
人をあはれ
　と　言ひそめにけむ

しみ〴〵と
　口あらそへり。
夏の木の　こずゑの蕊(シベ)は、
いまだ　さびしさ

ゆゑしらぬ　怒りに、
　蹈み〳〵し藏の段
　　みかげのおもて
たひらかに　あり

くらきまど。
今日も見てけり。
庭藏の高處(タカド)の牕は、
ひそやかに　あり

中學の　庭くまに
藏は立てりけり。
この壁の觸りは、
忘れずありけり

わかゝりし　怒りやすさを
思ひ居り。
額薄れし友に向ひて

若ければ
人の戀(コホ)しく
祕むべきも
恥ぢはぢてこそ。

言(コト)に出にしか

雪まつり

山

ふり仰ぐ
こぬれ　木末（コヌレ）のやどり木や。
雪ぞら
いよゝ　曇り來にけり

山深く
雪のふる日に　來ることも、
思へば、

ひさし。
人遠くして
遠つ丘脈の梢を　わたる
風ならし。
音としもなく
聽きのかそけさ

こがらしの林の上に
浮ぶもの。
冬枯れ色の　草山の丘根

冬深く
山は、ものげのなかりけり。
いで湯も、
今は　ひえてゐにけり

さ夜ふかく
月夜となりぬ。
山の湯に、
めざめて聽けど、
われ一人なる

雪のうへに、
とやを出で來し　大き顔。
　ものを　噛(モ)るらしき
鷄のつぶら目

別　所

雨霽れて、
山の木草の　うち白(シラ)む
　このも　かのもに
　　見覺えのある

庭芝のいきれ　くるしき
　砂のうへに、
蝨(イトド)はむれて

出で居たりけり

暑き日を
幾たびか　湯にくだり來て、
いよゝ
　疲るゝ身を思ひ居り

うつ〳〵に
疲れて居たり。
　鳥おどす
湯の山裏の　鐵砲の音

雪まつり

三州北設樂の山間の村々に、行はれてゐる初春の祭り。舊暦を用ゐた頃は、毎年霜月の行事であつた。

山峽（サマカヒ）の殘雪（ハタレ）の道を　蹈み來つる
あゆみ久し
　と　思ふ
　しづけさ

水脈(ミヲ)ほそる
山川(ガハ)の洲(ス)の斑(ハダ)ら雪。
かそかに　うごく
ものこそはあれ

ひたぶるに
磧の路をあゆみ行く
ひくきこだまは、
われの跫(アシ)音

せど山も　向つ峰(ヲ)も
見えわかれ居り。
殘雪(ハタレ)の明り
色沈みつゝ

背戸山のそがひに、
いまだ　雪かたき
信濃の國を
心に　もちつゝ
見えわたる山々は

みな　ひそまれり。
こだまかへしの　なき
夜なりけり

夜まつりの　こだまかへさぬ
この夜かも。
山々の立ち
しづけかりけり

鬼の子の　いでつゝ
遊ぶ　音聞ゆ。

設樂(シタラ)の山の
白雪の　うへに

豐根村の奥、山内(ヤモオチ)に宿る。

人おとの遠きに居む
と　山深く
屋場(ヤニハヤ)覓ぎけむ　ひとの
さびしさ

坐(キ)ながらに

こだまこたふる　屋敷(ヤドシ)標めて、
山の深きに、
おどろきにけむ

遠き世の山家の夜居や、
をとめ子は、
息づき若く
まじり居にけむ

花祭りの夜

たどゞの　翁語りや。
かつゞに
聽き判(ワ)く我も、
旅の客(キヤク)なる

川　阪を越えて
はろゞ　來つる旅。
翁の語る　聞けば、
思ほゆ

山びとは、

歡び　淺くなりにけり。
おきなの語り
　淫(ク)れ行けども

夜まつりに、
たはれ歡ぶ
　山びとの　このとよみに、
　　われ　あづからず

　さ夜ふかく
大き鬼出でゝ、

　斧ふりあそぶ。
心荒らかに　我は生きざりき

　榾の火は
一むら明り
　　消えむとす。
をとこを寄せず居る
　をとめあり

優(イウ)なりし舞ひ子も、
　かくて　山に經む。

山他妻(ヒトヅマ)に　なづさふ
見れば

山の木根　枕(マ)きて、
迭(カタミ)に　思ふらし。
顔見知りつゝ
一夜かなしも

山びとの　徹宵(ヨヒト)たはれて
明けにけむ
木原(コハラ)　くさむら

蹈みつゝも　思ふ
屋庭(ニハ)　後苑(ハタケ)
朝霧おもし。
人づまは
家のかしぎに、歸りけらしも

をとめ子は、
きそのをとめに還りゐむ。
木の根の夜はの
人もおぼえで

いやはてに、
鬼は　たけびぬ。
怒るとき
かくこそ、
いにしへびとは　ありけれ

遠き世ゆ、
山に傳へし　神怒り。
この聲を
われ

聞くことなかりき
山懷(ホド)の舞ひ屋(ヤ)
夜明くる　中倦(ナカダル)み。
まばらに、
よべの人顏の　見ゆ

夜まつりは、
朝に殘れり。
日のあたり强き　舞ひ處(ト)に、
鬼は　まだゐる

洗馬　長興寺

寺庭のゆふべ。
木の葉のおちつゞき、
つゞきつゝ
　色は見えずなりたり

寺の子ども
　わが前をさらず　語るなり。
山のかそけさは、
　ゆ
　ゑ
　ば

なれがたきかも

寺の庭
秋の日もはら
　みちにけり。
ものゝ音なく
　明るくてあり

樗散留韵

身のさかり
われは、はかなくなしにけり。
よき子の　わかき
見れば、おもほゆ

かならずも
さびしきことにあらねども、
死にゆく人の、みな

若きをおもふ

鳥のこゑ
鐘のひゞきの
身にしみて、かそけき山に
めざめけるかも

はろ〴〵に
若葉もえ立つ　くぬぎ山。
山原　やゝに
傾きて　見ゆ

山峡の明るを見れば、
　あはれなり。
瀬々のたぎちの
　うち白みつゝ

昭和職人歌

昭和職人歌

さんか

山住みの　心安さよ。
ぬすみ來し　里の鷄(カケロ)も、
痩せて居にけり

木地屋

山の木のともしきを　思ふ。
たまさかの　轆轤(ヒキレ)の
おとに、
心澄みつゝ

教　授

かへりみて、
紙魚(シミ)のすみかも
馴れにけり。
六十(ムソヂ)の髯は、

黄にかはりぬる

軍　人

町の子の　大刀(タチ)ふり遊び
見るさへに、
世は　靜けさに、
倦みにけらしも

辻碁うち

東京を　せましとぞ思ふ。
　すくなくも
　賭け碁の錢は、
へらざりにけり

　ゑいとれす

くちびるに、
色ある酒も　冷えにけり。
　頰にまさぐれば、
髮のみじかさ

　朝鮮人足

ふる國も
こゝも　住みよし。
妻も　子も、
人のそしりに　安けき
　見れば

　失業人

山川の激(タギ)つ急湍(ハヤセ)に
　妻をやりて
家ごもりつゝ
　思ふそらなき

その若き身すら思ほゆ。
かすみたつ　春日
　すべなく　あそぶ
と　言ふなり

朝けより

ほこりのにほひ　鼻に沁み、
　しく〳〵に
腹の　ひもじかりけり

切り通し道
　滑(ナメ)らに　潤(ウルホ)ふ埴(ハニ)の面(ツラ)。
まなこ瞑(ツブ)れば、
　舌うごきけり

餌(エ)に満(タ)りて、
ゆるぎあるける　犬のよさ。

大白犬(オホシロ)に
　生れざりけり
死ぬるより
　さびしきことあり。
　人多く
　鼠に食(カ)ふ薬をら　嚥(ノ)む
川波の光り　ともしく
　昏れにけり。
ひたすらに　來て、

つかれを　おぼゆ
大橋の下に
　かぐろき波のおも。
　倦める心は、
思はじとすも

自由勞働者

今日は
　よくはたらきにけり。

かにかくに
からだ疲れて、
　滿ふ我なり

大橋の夕やけ鴉
寢に歸る心をもちて、
我は
　越え來る

富家の女のよさや。
戯れ寄る心うごきは、

憎むにあらず

うち和む目に見ゆるもの
砂あげて　行く自動車も、
　賑はしきかも

今日三日。
朝ひたぶりの　晝あがり。
　虱つぶして、臥るが
　すべなさ

鍛工

牀(トコ)のうへに、
輪なりにおろす
　うなりはも。
身も飛べ　と思ひて、
ふりおろす鎚

熱鐵を　擊ちきる鎚。
　とすれば、
うまびとの身のまぼろしを

擊つ

怠業工人

もろともに
　喰(ハ)まざるべからず。
飢ゑ怒る妻子(メコ)を
　なだめて居る　心はも

軒並みに、
今日も　聲せぬ朝晏(オソ)し。

漱ひの音も、
憚りて吐く

我が心　知らざるにあらず。
ひた背向(ソム)き、
鏡に、
髮をうつしゐる妻

客間の氈(カモ)

柔(ナヨ)に乘りゐる　我が足の
この幅にすら
當る錢なき

よろしさは、
朝のたばこの　葉まきの香。
つく〴〵に、
われを　さもし　と思ふ

朝咽喉(ノド)をそゝる旨(ウマ)し香　立つこうひ。
友も　友も

今は
手を伸べて居(キ)る

仇の家に、
あげつらひに來し　ひた心。
崩(ク)ゆるに似たる
居ごゝちのよさ

白く肥えて
大き手を
さし出したり。

握手求むる
みづ〳〵しき手

この若きをとこに
預け居しを思ふ。
悔しくも
我(ワレ)の　命生きつゝ

千人(ニン)の怨み負ふ顔か。
この顔が。
つく〳〵に

見れど、
朗らなりけり

世を博く　說くあるじかも。
しかすがに、
技人(ワザビト)われ
身もて知りたり

よき人に、口吃り言ふ　我や。
世の階級(シナ)を無視(ナミ)す
と　揚言(コトア)げて來し

くやしくも　涙ながれぬ。
あはれよ
と　妻子(メコ)のうへ言ふ
若き人の前に

旗じるし　いふことやめよ。
我ごちは、
おのが面(オモ)すら

血もて塗りたり

春のことぶれ

春のことぶれ

歳深き山の
　かそけさ。
人をりて、まれにもの言ふ
聲きこえつゝ

年暮れて　山あたゝかし。
をちこちに、
山　さくらばな

白く　ゆれつゝ

冬山に來つゝ
　しづけき心なり。
われひとり　出でゝ
　蹈む
　　道の霜

しみ〴〵と　ぬくみを覺ゆ。
　　山の窪。
冬の日　やゝに　くだり行く

いろ

ね

あけ近く
　亟えしづまれる　月の空
むなしき山に
　　こがらし　つたふ

かさなりて
四方(ヨモ)の枯山(カラヤマ)　眠りたり。

遠山おろし　來る音の
　する

目の下に
　たゝなはる山　みな
　　低し

天つさ夜風
　響きつゝ　過ぐ

せど山へ　けはひ
　過ぎ行く　人のおと

湯屋(ユヤ)も
外面(ソトモ)も
　あかるき月夜(ツクヨ)

製作年表

大正十四年

三月　卒業する人々に（二首）

九月　枇杷の花（内、七首、日光二の八）

をとめに誨ふ（内、十首、同上）

羽澤の家（内、三首、同上）

甲斐・信濃（内、一首、同上）

十一月　となりの音（内、五首、くひ一の五）

冬來る庭（内、二首、同上）

大正十五年

一月　冬立つ廚（十一首、改造八の一）

となりの音（内、三首、同上）

出勤前（四首、同上）

もの忘れ（三首、同上）

冬來る庭（内、二首、同上）

先生（内、八首、日光三の一）

二月　先生（内、六首、日光三の二）

石見の道（三首、同上）

三　月　羽澤の家（内十二首、日光三の三）

五　月　赤彦の死（内、十一首、日光三の五）

甲斐・信濃（内、二首）

六　月　東京詠物集（内、五首、日光三の六）

夜の茶（二首、同上）

かゝる人あり（内、二首、同上）

赤彦の死（内、二首、同上）

隼人の國（八首、同上）

鵠の人々（内、六首、くゞひ二の四）

七　月　東京詠物集（内、八首、日光三の七）

鵠の人々（内、六首、くゞひ二の五）

零時近く（二首、同上）

赤彦の死（内、一首）

八　月　東京詠物集（内、十四首、日光三の八）

別腸譫語（内、三首、同上）

九　月　夏のわかれ（十六首、改造八の九）

十　月　家の子（三首、くゞひ二の七）

鵠の人々（内、一首、同上）

十一月　山道（十八首、日光三の十一）

東京詠物集（内、四首、同上）

昭和二年

一　月　大阪詠物集（内、五首、大阪朝日新聞）

秋山太郎（九首、くゞひ三の一）

書のいこひ（五首、日光四の一）

別腸譫語（内、二首、同上）

二　月　大阪詠物集（内、五首、くゞひ三の二）

三　月　門中瑣事（内、七首、くゞひ三の三）

四　月　門中瑣事（内、七首、改造九の四。内、十五首、近代風景二の四）

五　月　若き人の家（内、五首、くゞひ三の五）

六　月　東京詠物集（内、十四首、日光四の四）

繪をかく夏子へ（子供の創作六）

ある人に（一首）

七　月　氣多はふりの家（内、六首東京朝日新聞。内、八首、くゞひ三の七）

灘五郷（内、一首、東京朝日新聞。内、六首、くゞひ三の七）

八　月　氣多はふりの家（内、五首
　國學院雜誌三十三の八）
　灘五郷（内、五首、同上）
九　月　青山に向ひて（七首、日光
　五の一）
　伊豫の國（二首、同上）
　古泉千樫（内、二首、同上）
十　月　上州河原湯（内、四首、く
　ゞひ三の十）
十一月　大阪詠物集（内、五首、く
　ゞひ三の十一）
十二月　昭和職人歌（内、七首、改
　造九の十二）
　上州河原湯（内、六首、日光五
　の二）

灘五郷（内、二首、同上）
甲種合格の大學生に（二首、同
　上）
風の音（二首、くゞひ三の十二）
古泉千樫（内、二首、同上）

昭和三年

一　月　大阪詠物集（内、五首、大
　阪朝日新聞）
冬草（八首、くゞひ四の一）
四　月　酒嗜む若き人に（一首）
　旅の前夜（二首、くゞひ四の四）
七　月　七月十七日（三首、くゞひ
　四の七）

多武峯（五首、くゞひ同上）
八　月　王道（一首）
十一月　柁樓底歌（四首、改造十の
　十一）
　一の宮（五首、同上）
十二月　大營會近く（二首、くゞひ
　四の十一）

昭和四年

一　月　大阪詠物集（内、九首、大
　阪朝日新聞）
　枝ひゞく（三首、澁谷文學四の
　一）
四　月　山（七首、改造十一の四）

昭和職人歌（内、六首、同上、
　内、二首、くゞひ五の四）
五　月　別所（内、一首）
七　月　藤野一友（一首）
八　月　雪まつり（内、十一首、改
　造十一の八）
　昭和職人歌（内、十一首、同上）
十　月　洗馬長興寺（三首）
十一月　別所（内、二首、くゞひ五
　の九）
十二月　雪まつり（内、十九首、く
　ゞひ五の十）
　櫻散留韵（五首、遊牧記二の一）
　春のことぶれ（八首）

昭和五年一月五日印刷
昭和五年一月十日發行
（春のこゝろぶれ）　定價二圓八十錢

著者　折口信夫
東京市神田區北甲賀町四番地
發行者　坂口保治
東京市神田區三崎町三ノ一四六
印刷所　株式會社一匡印刷所

發兌　東京市神田區北甲賀町四　梓書房
電話神田二七七五番
振替東京七八六四四番

歌集

春のことぶれ

釋迢空著（最新刊）

歌の世界はひろい。然しそれは美の世界であることによつて成立つ。そしてその世界は歌ふものと歌はるゝものとの心の世界である。この二つが一つになる時だけ美しさが光る。この意味に於て此の歌集は得難き美の世界の展示である。

常にゆたかな廣さをもて限りなき洞察の鋭さに生きる作者は學究として國學に於ける獨創的な地位をもつと共に、歌人として獨自の立場を守る折口信夫先生、釋迢空氏の歌集であり、然かも未發表作の大集である。

目次

羽澤の家（八八首）
人ごと（七三首）
東京詠物集（五四首）
門中瑣事（三六首）
山かげ（四八首）
風の音（三五首）
氣多はふりの家（四四首）
大阪詠物集（三二首）
雪まつり（四五首）
昭和職人歌（三五首）

菊判特織紬
裝面取天金特製
定價二圓八十錢
送料二十七錢

東京市神田北甲賀町四番地
梓書房
電話神田二七七五番
振替東京七八六四四番

伊良子清白著　詩集

孔雀船

菊判パツクラム裝　定三・五〇
面取天金特製　送二七

婉麗のうちに清雅を忍ばしめ、奢華のうちに枯淡を思はしむるは、『孔雀船』の著者の詩篇である。殊に幾百篇の詩より嚴選するところの佳篇を以て成る『孔雀船』に至つては句々寶石の如く、節々彩翎の如く、長篇は白玉城廓の如く、短篇は燭星の如しといふも過言ではないのである。日本象徴詩の源をたづね、浪曼詩の本流を觀むとするものはまづ、辭氣豪邁にして風調清深なる本詩集の佳篇に就かねばならぬ。

横瀨夜雨著　詩集

雪燈籠

菊判パツクラム裝　定三・二〇
面取天金特製　送二七

其詩や、態緊切、調森嚴、凝乎として穿つ可からざるの格、毅然として犯すべからざるの威、殆んど是れ格上文字にあらず。

まことに筑波根詩人夜雨氏の詩は生血を注ぎて以て成れるものであつて、病苦の寂寥にも婉轉飛禽の花間に翔翔するの趣を生めるもの、當に明治抒情詩の珠玉ともいふべきであらう。かの幽暗の裡に艷色を宿せる感傷詩篇は清晨幽夜、獨り靜かに繙くべきものである。

北原白秋著　長歌集

篁

菊判パツクラム裝　定二・八〇
面取天金特製　送二七

『篁』は北原白秋氏の長歌の總てに新なる彫琢を加へて一卷となせるものなり。或は葛飾の蕭條たる冬景に思ひを寄せ、或は小田原の山莊にあつて竹林の日夕を樂しみ、移りゆく季節の風と光とに心を寄せたる、そのなりの古體、一字一句にだにも水墨の薫香、丹青の光耀とを見るべし。また讀者は藝道の心法者とも言ふべき同氏の風格、氣稟を隨所に偲ぶことを得べし。

北原白秋著　童謠集

月と胡桃

菊判パツクラム裝　定四・五〇
面取天金特製　送三六

詩の香韻は童謠のうちにも保たれてあらねばならぬ。眞に藝術的香氣氣品をもち新鮮なる光をもつものは單に子供のみならず、ひとしく大人の心にも觸れうる筈である。眞に童心を童心とし、童語の振幅を知り、詩を詩とするかぎりは常にやさしい永遠の母の唄を偲ばしむるであらう。今日の多くの童謠作家は詩の香韻を忘れはて童ごころを疎んじ、卑俗と輕窕に泥み心あるものをして顰蹙せしむるばかりか子供にさへも倦かれつつある。斯る時にこの集の清新體を見るがよい。新しき光と熱と香ひはここに溢れてある。

日夏耿之介著

明治文學樸考

四六判面取　定三・二〇
天金パツクラム裝　送二七

日夏氏が詩人としてのみならず文學史家としても亦殊れたる所以のものは、孜々として倦むなき博搜の熱意と調整の綿密、考證の精覈と批評の尖鋭なるところに在り本書は樸考とは言へども一の體系を保てる特異の明治文學史にして著者の特色は玆に遺憾なく發揮せられたりといふべし。明治文學の諸相を新しき眼を以て深く觀察せんとする者の必讀すべきものとして廣く江湖に薦む。

中村爲治譯註

キプリング詩集（英和對譯）

四六判パツクラム裝　定一・八〇
上製二〇〇頁　送一八

キプリングの名の日本に紹介せられたるは極めて古く併もその詩の邦語に譯せられたるものは殆んど無い。彼はクキラ　クウチの言へる如く、現在生存せる英國詩人中にて唯一の天才的なる ballad-Writer であつてその作ダニ　デイーヴアーの如きは余りにも有名である。その詩は健全にして男らしく、題材は多種多樣に亙り、纖細微妙の筆を用ひずして人間性の深きに觸れ、その有りの儘なる姿をその儘に表はしてゐる。本書に收められたる二十篇は悉くその傑作である。

横瀨夜雨著

太政官時代

四六判パツクラム　定四・六〇
裝天金六百頁　送二七

維新史の研究は近時の流行の觀がある。しかも多くは無選擇なる文獻の抄錄、無定見なる史觀の敍述が多いのである。斯る中に、幾多の文獻を批判選擇して、太政官時代の政治的沿革と、それを中心としたる社會の渦卷きとを綜合的に研究し、平明に興趣ふかく敍べたる本書の如きは維新史に興味をもつ者の好個の伴侶となることを確信する。

中村爲治編

ENGLISH PROSE

四六判假綴本文102頁
定價1.00　送0.10

本書は英國文學に於ける散文の粹を集めて編んだオックスフォード・ブックの中より日本に於ける英語研究生の爲めに更に撰集せられたものであつて、英國近代の巨匠の手になれる珠玉の如き散文に滿されてゐる。それは極く短きものであつても英國傳統の本格の氣品と脈胎とを具備せるものであつて、英語及び英文章に練達すると共にそれを繙讀するに最も格好のものであらねばならぬ。

氷と雪

全日本スキー聯盟會長男爵 稲田昌植序
日本山岳會員 大朝記者 藤木九三跋
日本山岳會員 林學士 加納一郎著

冬來！樹氷咲く壯麗の冬氷雪輪廻の經典出づ!!ウインタースポーツに勇躍する若人は固より深雪國日本の家庭及び銀界に潑溂たる小年の教育指導に當る諸賢へ冬行必携の伴侶として薦む。

氷雪は恐るべき敵ではない、正しく深く認識する事によつて味方として享樂し生活に迄取り入れる事が出事る。

四六判三二〇頁用紙上質
挿畫四十一、圖判コロタイプ等十二枚裝幀清雅
定價 二圓五十錢
送料 十錢

要目

一 氷雪思慕
ウインターアルピンズム人類の氷雪への歩み・雪華圖說
二 氷と雪の理學的性質
雪達磨の理論・氷の電氣的性質、氷の厚さと抗壓强
三 氷の藝術
氷の立體作的作品、樹氷の理、霜模樣
四 降る雪積る雪
根雪、新雪量と積雪量、積雪計、最大積雪量推定、
五 雪華結晶研究
雪華の研究史、雪華の分類
六 積雪研究
雪中露營、雪の性質と其形態
七 積雪異常
雪崩の分類、雪崩の速度、雪溫の變化、雪と河
八 氷河と氷山
山嶽地の積雪變化、氷河の成立、流下運動、氷河の流路、氷山の豫知、流氷
九 氷期及び人と寒冷
アルプス氷河の消長、人類到達の最高所

詩の起原

文學博士 東京高師教授 新村出序
竹友藻風著

詩の起原に關する問題は文學を研究の對象とするものが一度は必ず考へて見なければならぬものであると共に、人類文化の發達に伴ふ多くの興味ある事例を提出する。本書は宗教祭式と文學の關係より考察を始め、劇叙事詩及び叙情詩の系統に屬する原始文學の研究を述べ、最後に詩の起原についての理論的考察を試みられたものである。

菊判バックラム裝面取天金上製コロタイプ一本文五〇〇頁
定價 四圓八十錢
送料 三十六錢

要目

第一章 詩と散文
第二章 ディテュラムボス
第三章 垣歌
第四章 ディオニュソス
第五章 デメエテエル
第六章 生成の神
第七章 迦具土
第八章 踏歌
第九章 祭式と原始文學
第十章 劇の系統
第十一章 叙事詩の系統
第十二章 バラッド
第十三章 バラッドと日本文學
第十四章 叙情詩の系統
第十五章 童謠と祭式
第十六章 童謠と原始文學
第十七章 形式の分岐
第十八章 藝術動機
第十九章 個人の釋放
第二十章 詩の領域
補遺
索引

郵便はがき

東京市神田區駿河台
北甲賀町四番地
梓書房行

御手數ながら投函下さいます様恐れ入り毎に御記入の上御存知申上げ度いと存じます

（春）

評批御●想感御	メ求買御名店書	所住御	姓名御